

---

# “ D ” の世界

有華 桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

“D”の世界

### 【Nコード】

N5446G

### 【作者名】

有華 桜

### 【あらすじ】

その『世界』が『分岐』する時、物語は始まった。

イメージは白と黒。

僕にとつてそれは全であり無。

こんなにも閉ざされた世界だと言つのに、こんなにも僕は自由だ。

肌寒い冬の夜。

とある街中の小さな公園で、血塗れの少女二人を見下ろした。

「ねえあなた、だいじょうぶ？」

唐突に声をかけられて、僕は後ろへ振り返る事にした。

首を捻るだけではあまりにその姿を直視できなくて、仕方なく抱えていた膝を崩して立ち上がる。僕はそのまま無言で背後に視線を向けて、ようやく声の持ち主の姿を確認した。

「わあ。意外と可愛い顔してるのね。その眼鏡がなかったらもつといいかも」

僕を見て一言、目の前にいる少女は言った。

最初は暗がりによく解らなかつたけれど、長い髪を金色に染めてるようだ。外見から日本人である事は予想がつくけれど、いかにも派手な格好をしていてあまり気に食わない。

「なんです、急に声をかけてきてその発言は」

少し腹が立ってしまった僕は尖った口調で言い放ち、金髪の少女を睨みつける。

「ああ、ごめんごめん。気にしたんだったら謝るわよ。でも可愛いと思ったのは、ホント」

「……少しも謝罪の色が見えませんか？」

「だからごめんなさいってば。それよりあなた、さっきまで何してたの？」

納得もできないままに話題を変えられて、僕は少しムツとなる。

けれどこのまま引き摺るのも面倒臭い事だし、さっさと彼女の疑問を解消させてさよならするとしよう。

「どうすれば人は死ぬのかなあ、と考えていただけです」

そんな僕の答えに少しは驚くだろうかと期待していたら、まったく予想外の言葉が彼女の口から返ってきた。

「へえ。それ、面白いわね」

深夜0時を回った頃だ。

発見現場の公園は、いつも自宅から近場のコンビニまでの途中にあるショートカットコースで、いつものように夜食を買い漁りにコンビニへ向かっていた途中。

血塗れの少女が、二人。

当然声は出さなかったし、なかった事にして通り過ぎた。だとい  
うのに、どうしてもその光景が脳裏に焼きついてしまって、途中で  
旋回して同じ道に戻ることにした。

騒ぎにはなっていないようだし、恐らくまだあの死体は残ってい  
るだろう。

それだけを考えながら、発見現場へたどり着いた　はずなのに。

そこに、血塗れの少女達の姿は見えなかった。

「死んでから蘇る方法？」

金髪の少女は僕に問い掛ける。

確かに僕の言っている事は突拍子も無い事だ。疑問を抱かれるの  
も無理は無い、思う。

「というよりは、『死んだはず』を『死んだかも』にする、ですか」

「え、ちょっと待って。さすがに話についていけないんだけど……」

「簡単な事です。例えば、奇跡の生還を遂げたっていう人物は歴史  
上たたくさんいるでしょう。それとは別に、奇跡が起ころずに死んで  
いった人物もまた同じように存在している。これらの言う『奇跡』  
ってというのは何だと思えます？」

「奇跡は奇跡……ようするに運がよかった、ってことじゃないかし  
ら」

「そうですね。結局は死ぬか死なないかの二択なのだとすると、死

んだ場合と死んでない場合、二つの可能性があるわけです。そして、どちらの可能性に行き着くか解らないのなら、そこで世界は分岐している事になりませんか？」

血に塗れた少女達が倒れていたはずの場所。

あれだけ飛び散っていた赤い血の跡も、今は無い。

もしかしたら、くだらない世界ゆめを見ていただけなのかもしれなかった。

「ですが、この話にも当てはまらない存在がいます。それは自分自身です」

「自分自身？」

「はい。結局自分が死んでしまつたら、それは『自分が死んだ』事に代わりがない。観測しているからこそ『どちらか解らない』のであって、自分に訪れた事実に関してはただの現実でしかないワケです。自分が死ねばその世界は終了、ゲームオーバー。自分が死ななかつた世界はあるでしょうけれど、自分が死んだら世界は終わるんですからその場合は分岐しているとは言い難いですよね？」

「ようするに、何が言いたいの？」

「僕には僕の世界があります。それを理解したとき、僕は僕の世界の中で『選択権』を手に入れた。コインを投げた時、表か裏かを選べる力を。つまりは、そういうことです」

それだけ言って、僕は目を閉じる。  
少し経ってから目を開いた時、金髪の少女は姿を消していた。

「僕とあなたは出会わなかった。これも、ひとつの『可能性』だと言っことです」

次の日 ふと目が覚めて、気が付く。

血塗れの少女達。

記憶違いだとは思えないリアリティのある光景が、未だ脳裏に焼きついて離れない。

もしかしたらと思って、昼食前の食料調達もかねてコンビニへ向かう事にした。

イメージは白。

閉ざされている世界。

僕はこのちっぽけな世界の中で、自分だけの世界へ落ちていく。

イメージは黒。

僕一人だけの世界。

全ての『分岐』を選び尽くし、僕だけの意思がそこにある。

繰り返される悲劇の夢。

現実の世界で『選びたかった』たった一つに分岐点を、僕は僕の世界の中でひたすらに繰り返している。

公園には多くの人ばかりと、複数のパトカーや警察官達が集まっている。

紛れもない、現実がそこにあった。

昨日見た悲惨な光景は夢ではなく、自分自身の作り上げた願望こそが夢だった。

この俺が二人の少女を『殺した』世界が、そこにある。

後日、ニュースでは某町で起こった通り魔殺人事件の報道が行われた。

容疑者は犯行現場付近に住まう青年。

被害者は二人の少女で、一人は長い金髪の派手な少女。

もう一人は黒髪で眼鏡をかけた少女で、二人とも意識不明のまま病院へ運ばれた。

金髪の少女はまもなく死亡。

黒髪の少女は一命を取り留めたものの、未だ病院の一室にて入院している。

The world of "Dream" / 了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5446g/>

---

“ D ” の世界

2010年12月14日18時12分発行